沖縄タイムス　第3種郵便物認可

文化

国境から世界を変える
―北大で沖縄展示開催
博物館がつなぐ「辺境」
翻弄の実態、中央へ問う

岩下　明裕

いわした・あきひろ　北海道大学スラブ研究センター教授。『北方領土問題：4でも0でも、2でもなく』（中公新書）で大佛次郎論壇賞受賞

私が日常的に沖縄を意識するようになったのは、日米安保再定義が話題となった1996年7月、当地で17年ぶりに開催された日本平和学会の集会に参加してからだ。米軍基地問題に真剣に取り組んでいた大田昌秀知事（当時）の迫力にも圧倒されたが、集会の最後で聴いた声に心を射貫かれた。「お帰りになっても沖縄を忘れないでください」。それから、私は沖縄の新聞を読みつづけている。

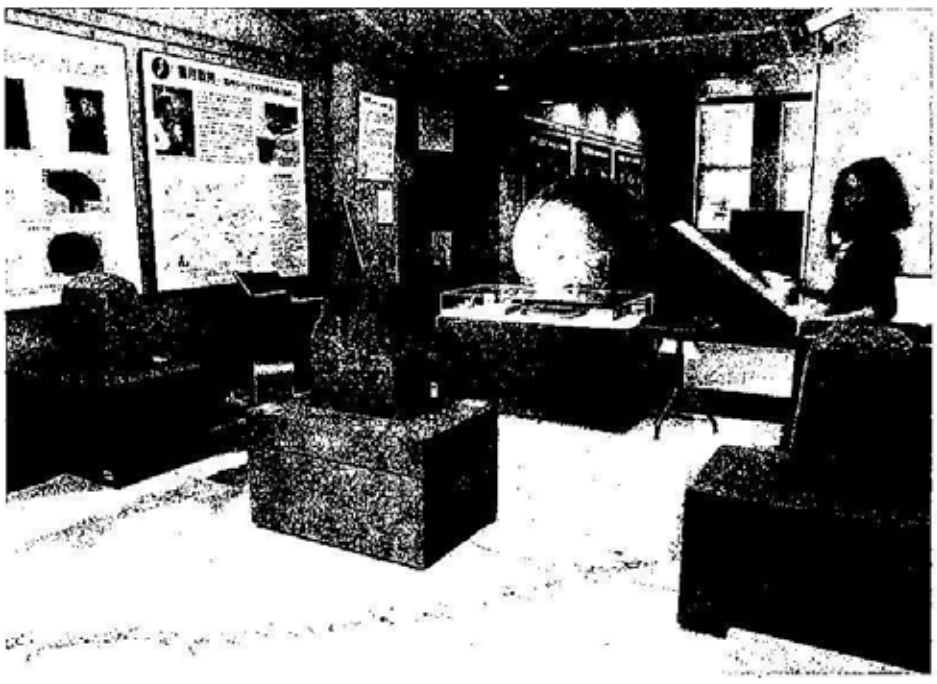
鳩山由紀夫首相の「功績」のひとつは、疑いなく、普天間によって日本全土のニュースを連日、沖縄一色にしたことだが、日米合意と辞任によって、またすぐ沖縄は忘れられるに違いない。

現物からの体感

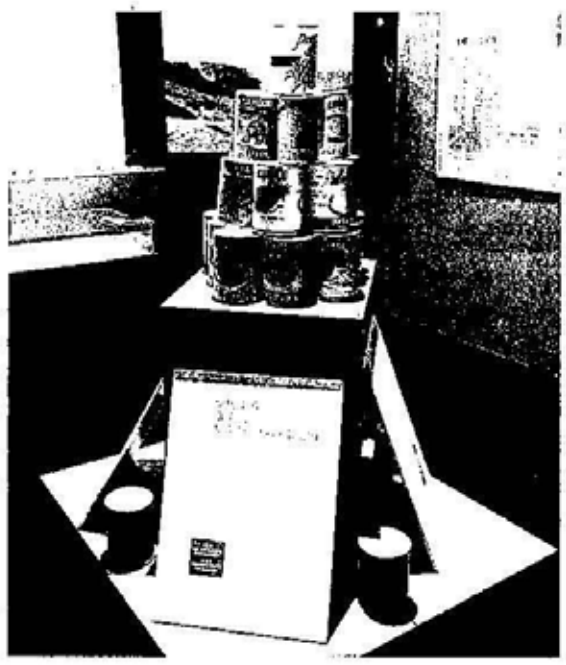
沖縄を忘れないためには何をしたらいいのだろう。私は北海道に沖縄をもってこようと考えた。文科省のグローバルCOEプログラム（文部科学省研究拠点形成等補助金事業）「境界研究の拠点形成」はユーラシア地域（旧ソ連やアジア）の境界研究（ボーダースタディーズ）の中心を北海道大学につくろうとする野心的な企画だが、斬新さは大学総合博物館に展示ブースを設けたことにある。

「辺境」を頭で考えていてもわからない。現物をみて、実態を知り、体感してもらう。2009年10月からスタートした第1期展示「ユーラシア国境の旅」では、ヨーロッパの事例を皮切りに、コーカサス、中央アジア、中国、インド、パキスタン、ロシアの国境問題を解説し、ブースを写真と地図で埋め尽くした。

12月からの第2期では「知られざる北の国境：北緯50度の『記憶』」と称し、（日露戦争後に設置された四つのうちソ連崩壊後に日本国内に唯一持ち込まれた）樺太日露国境第2天測標石、根室と南千島・国後島（現在の北方領土）を戦前に結んでいた海底ケーブル、ソ連抑留後に大作「シベリヤ・シリーズ」を描いた香月泰男の習作「業火」を展示した。



日露戦争後に割譲された国境に設置された標石。中央が実物で左右はレプリカ（第2期での展示）



八重山と台湾のパイナップル缶詰。そのラベルからは、戦争などによって変遷した国境などを垣間見ることができる

映し鏡の「南北」

そして5月14日からの第3期「海疆ユーラシア：南西日本の境界」では、北海道の住民に北と南の「辺境」の歩みを重ねて考えてもらうべく、八重山と台湾の交流史、米軍統治下で本土との間に引かれた「国境」に翻弄された人々に焦点をあてている。

実は南北の「辺境」の軌跡は映し鏡だ。19世紀後半の明治政府による北の国境策定は、琉球王国を日本に統合し南の国境を決める試みと連動している。

日清戦争による台湾の、日露戦争による南樺太の、第1次世界大戦による南洋諸島の取得といった帝国拡大の歴史は、その境界を揺り動かした。敗戦のプロセスで、択捉、国後などの千島列島も沖縄のように捨て石にされ、ソ連と米国の違いはあれ、占領された。米国は島を日本に返したが基地を残したまま、ロシアの方は今も居座りつづける。状況は異なるが、南北で暮らす住民たちの苦しみは変わらない。

だが国民のなかには、択捉、国後、色丹、歯舞がどこにあるか知らない人も多く、彼らは「四島返還」が当然だと言い放つ。1955年の国交回復交渉のとき、日本は当初、色丹と歯舞だけでソ連と平和条約を結ぼうとしていたはずだ。そして今や根室市民の半数以上が、平均年齢が75歳を越えた元島民たちの多くが、内心では、ロシアと妥協してでも早く解決してほしいと願っているのに。

捨て石と無関心

私は数年前、一日も早く行き詰まりを打破するため、島を日ロで分け合ったらどうかと提唱した。ある新聞社からは「国賊」「北方領土が泣いている」と罵倒されたが、反論は簡単だ。敗戦プロセスのなかで、日本は「国家」を護るため、自ら進んで島をソ連に引き渡した。国によって「島は捨てられた」。一度捨てたはずのものを後から取り返そうと語気を荒らげるのは自由だが、島を二度、踏みにじっているとことを忘れるな。

捨て石と無関心。だが何かがあるとナショナリズムの道具にされる「辺境」。「韓国人に乗っ取られる対馬」「中国にのみ込まれる与那国」。実態が伝えられないまま一部メディアによって煽られた間違ったイメージを打破すべきだ。そのためには国境地域の実態を正しく伝え、その意味を問い続けるとともに、中央によって寸断されている「辺境」と「辺境」のネットワークをつくること。「辺境から世界を変えよう」。

沖縄の方々にも樺太の国境標石や千島の海底ケーブルをみていただきたい。博物館のささやかな展示が、南と北の「辺境」をつむぐ糸になる。

◇　◇

グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の第3期展示「海疆ユーラシア：南西日本の境界」は11月14日まで北海道大学総合博物館で開催。問い合わせは同大スラブ研究センター、電話011（706）2388。